慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	オイ ション ゴウ君学位請求論文審査報告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2007
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.80, No.10 (2007. 10) ,p.171- 177
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20071028-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オイ ション ゴウ君学位請求論文 審査報告

マレーシアからの留学生オイ ション ゴウ（Ooi Shong Gor）君から提出された学位請求論文「国際人口移動とジェンダー―アジア大都市圏で働く日本人女性のジェンダー観とキャリア形成―」は、彼女が修士論文「国際移動とジェンダー―滞日高学歴中国人女性のジェンダー役割観の事例調査―」と同様の関心から出発して、アジア地域で働く日本人女性五〇人以上にインタビューをした結果から、論文にまとめられたものである。

一　本論文の構成

論文の構成は次の通りである。

序章　国際移動と日本人女性
第1節　問題提起
第2節　研究方法とデータ収集
第3節　研究範囲
第4節　論文構成
第1章　国際人口移動論と移住日本人女性に関する先行研究
第1節　国際人口移動理論におけるジェンダー
第2節　日本人女性の国際人移動Ⅰ
第3節　日本人女性の国際人移動Ⅱ
第4節　社会化におけるジェンダー役割理論
第2章　現代日本におけるジェンダー役割
第1節　日本家族における女性の役割
第2節　日本社会におけるジェンダーと高等教育
第3節　日本社会におけるジェンダーと就労
第4節　日本人女性のライフコースとジェンダー意識
第3章　日本人女性とアジア大都市圏における現地採用化
第1節　アジアにおける日本企業進出と日本人の雇用実態
第2節　アジア大都市圏の経済と社会状況におけるジェンダー問題
第3節　本研究の調査対象者
第4章　日本人女性の移住過程―背景と動機―
第1節　出身家族背景と家庭教育
第2節　日本での職場経験
第3節　移住動機の類型
第5章　移住後の生活変容―戦略と意味―
第1節　移住女性の職場生活

第2節　移住女性の家庭生活
第3節　戦略と問題
第4節　海外移住の意味
第6章　ジェンダー観の変容とキャリア形成の事例分析
第1節　海外移住する以前の意識
第2節　海外へ移住した後の意識
第3節　意識変化の要因
第4節　まとめ
終章　アジアにおける移住女性の比較社会学に向けて
第1節　本論文の成果
第2節　研究の限界と今後の課題

二　本論文の概要

本論文の主要な目的は、海外での就職や海外で生活するライフスタイルなど、選択の幅が広がってきた今日において、ジェンダーの観点から高学歴日本人女性の移住過程及び移住生活体験を明らかにすることである。欧米の先進諸国に留学などを目的として移動する高学歴移住者の行動と異なり、アジアの大都市圏に移動する日本人女性の場合には、労働するという自律的な行動を伴うために、移動においてどのようなプッシュとプルの諸要因が働いているのかが探究されている。海外で働く当事者たちへの詳細なインタビューを通して、移住女性たちが経験した日本と移住国、両国での職場と家庭における生活体験を調査し、さらにホスト社会で生き抜くための様々な戦略や意味について明らかにしたものである。本研究の主な問題提起は、移住女性のジェンダー観とキャリア形成がホスト社会でどのような影響を受けて変化し、または持続しているのかを分析することであった。国際移動が、女性の生き方及びライフコースにどのような影響を与えるのか、こうした疑問を、本研究の移住日本人女性の移住過程と生活に関する調査から明らかにしたわけである。移住女性たちは、生活者かつ労働者として様々な社会の仕組みの中で規範や文化に制限されながら、ジェンダー観と就労観が再社会化される場合があると考えられる。従って、女性移住者たちは、二つの社会における仕事と家庭の領域での体験は貴重であり、社会・文化面や雇用と生活環境の両面における変化によって、意識の変容が現われるのではないかという仮説を立てたのである。日本人女性移住者のジェンダー観とキャリア意識の変容を通して、日本社会とホスト社会の実態を反映することができると言えるわけである。

本研究の実証的な調査によって、日本人女性移住者が、日本からアジア大都市圏への移動・移住を通してホスト社

会に適応する過程で、ジェンダー意識が変容していくという事実が明らかになった。一部の日本人女性対象者のジェンダー観が再社会化され、流動化することによって、彼女たちのキャリア意識に影響を与え、そのライフスタイルも大きく揺らいできた。さらに、その中の一部の対象者は、キャリア意識が再強化され、自己実現やキャリアを追求するに至っている。例えば、マレーシアの日系企業で働くAさんは、マレーシアで二人の子供を出産した後も、外国人のベビーシッターやナーサリー（託児所）に預けて、職場に復帰しており、日本では性別役割分業意識が強かったが、マレーシアでは母親意識がやや弱まって、そのジェンダー観が変容していく過程が描かれている。九人の意識の変容の事例と二人の意識の持続の事例が詳細に記述されている。

本論文は、大きく二つの部分に分けられる。前半では、第1章から第3章にかけて、マクロなデータに基づいて理論的な考察がなされている。第1章では、一九八〇年代以降、国際人口移動理論において、ジェンダーが一つの変数として研究されてきたが、それにもかかわらず、発展途上国から国際移動を行った非・半熟練の女性移住者に注目する傾向があった。そのため、本研究では、アジア諸国内に国際移動を行った高学歴層の日本人女性移住者を取り上げている。既存の先行研究を考察し、海外に在住している日本人女性を特定のグループに分類して研究する傾向があることが明らかになった。

一方、社会学におけるジェンダー役割理論によると、男女のジェンダー役割は、第一次及び第二次社会化を経て形成されていく。異なる社会と文化圏に移住することによって、移住女性が持つジェンダー観とキャリア意識の再社会化の過程を追求することによって、移住女性の家庭と仕事に関する役割の変容が検討されている。

第2章では、本研究の調査対象者が、移住する以前に持っていた、日本の社会背景と文化について概観されている。一九七〇年代に、日本のジェンダー役割分業は家族、学校、職場といった様々な領域で定着し、それには核家族によるサラリーマンと専業主婦の大衆化という背景がある。しかし、第三次産業の発展に伴い、男女雇用機会均等法が実施され、日本人女性の就業率が次第に増加してきたことによって、日本人女性のライフコースが、主に専業主婦から、再就業、継続就業などへと多様化してきた。

この二〇年余りの間に、日本の社会変動を経て、女性の変化が著しく進んできた。社会全体におけるジェンダー役割分業に対して、否定してきたにも拘わらず、育児の役割

は依然として主に女性の役割である。さらに、社会システムが変革しないまま、特に企業における長時間労働によって、男性は生産役割、女性は再生産役割に偏る傾向が強いのである。

第3章では、本研究が取り扱うアジア大都市圏と日本との関連を把握する。一九八〇年代以降、アジア大都市圏の経済発展に伴い、数多くの多国籍企業が進出し、一九九七年までに、日系企業を中心に、アジア大都市への投資金額と数が次第に増加してきた。それによって、アジア大都市において日本人に関する採用と募集が年々増えている。日本人の雇用形態は、従来の日本人男性の「駐在員」から「現地採用」、「グローバル社員」へと多様化しつつあり、多重構造となってきている。そこで、「現地採用」として雇われた日本人女性を対象にしたアンケート調査を実施し、調査対象者に関する集計データを分析した結果、対象者は現地社会において、管理職と専門職に就く者が大半であることが判明した。

後半では、第4章から第6章にかけて、本調査の主な目的である日本人女性対象者のジェンダー観の変容とキャリア形成を質的な調査によって実証分析している。

第4章では、調査対象者が日本にいた頃、彼女たちの背景、すなわち出身家族、学校教育と職場におけるジェンダー役割分業を体験した「語り」から、日本社会におけるジェンダー役割分業の実情を反映していることが明らかになった。調査対象者の移住する以前の意識、特にジェンダー意識を把握することができた。五〇人以上の調査対象者は、当初の移動・移住動機を、「日本脱出長期滞在型」、「海外体験帰国型」、「海外留学生型」そして「家族結合型」といった四つに分類することができた。これによって、本研究の調査対象者の移住動機について、個人の詳細な動機を含みながら、四つのカテゴリーに分けられることにより、全体的に理解しやすくなったわけである。

第5章では、調査対象者から、日本の生活との比較を通して、移住後の生活変容について聞き取りを行ったデータが分析されている。まず、アジア大都市圏では、実力主義に基づく働き方、人材流動化による高い転職率などの雇用実情がある。次に、ホスト社会では、育児と家事に関する様々なサポートがあるため、女性に有利な労働環境があることが明らかになった。調査対象者たちは、グローバル化が進むアジア大都市で、身に付けた外国語を「武器」にする戦略を持っている。さらに、グローバルな職業経験を積むことが、将来のキャリアの上昇につながる一つの手段で

あると考えている。従って、日本人女性対象者の多数が、「現地採用」であっても、現地ホスト社会での職場と家庭生活を肯定的に語っていた。

第6章では、本調査の目的である意識の変容を九人の事例調査によって詳細に分析している。個々の調査対象者は個人としての体験が異なっており、さらに主観的な考え方を持っている。しかしながら、個々の移住動機を始め、移住過程と体験までのライフストーリーを通して、彼女たちのジェンダー観が再社会化されることを探究することができた。総括的に、移住女性の全体的な意識変容をもたらす四つの規定要因、「家事と育児の解放」、「夫の家事と育児分担」、「キャリア意識の再強化」そして「ジェンダー意識の再社会化」を考察している。

今日、グローバリゼーションが進行する中で、様々な目的を持つ人々が、自発的に国境を越え、新たな生活に挑む移住者が増加している。本研究で扱う一時移動・移住者の中には、現地滞在が一定の年数を予定したものの、結婚または就職によって、定住化、または長期化する傾向を示している女性も少なくない。従って、このような事例研究によって、調査対象者の滞在が長期化している間に、ジェンダー観やキャリア意識の変容を鮮明に描き出すことが可能となったのである。

三　本論文の評価

オイ君の研究の独創性は、第一に国際的な観点から日本人女性のジェンダー意識を解明している点である。彼女自身がマレーシアからの留学生として約一〇年近く日本に滞在して、この間日本語の勉強から始め、調査研究を重ねながら、自ら結婚、出産、育児、家事などの経験を重ね合わせて、今回の博士論文のテーマである国際的な移住女性のジェンダー観とキャリア意識についての研究に取り組もうとした着想は独創的である。働く女性の意識の変容や母親意識については、既存の研究も存在するが、国際人口移動や国際労働移動の観点からこの問題にアプローチされた研究は今までなかった。北京、上海、香港、マレーシアのクワラルンプール、シンガポールなどアジア大都市圏で現在働いている日本人女性を対象とした調査である点が独創的であり、国際移動の観点からジェンダー観やキャリア形成意識を分析している点である。

また、第二に日本人女性の「母親意識」の特殊性や子育てにおける「三歳神話」などを外国人の視点から分析している点も独創的である。日本人女性に特有の労働力率のM

字型カーブに対して、子育て期の外国人労働力の導入についても一つの方策として考えられている。また、キャリア形成についても、日本企業になお残るジェンダー差別についても、国際的な視点から批判されていて、説得力を持っている。

博士論文として評価できる第三点目は、理論的考察と実証的な事例分析とを統合させて展開している点である。前半では主として国際的な人口移動論とジェンダー論、社会化・再社会化論をめぐる理論的な考察と既存統計資料のデータ分析にあてられている。後半部分でそれらの考察を踏まえて、上海・北京・香港、クアラルンプール、シンガポールなどのアジア大都市圏に移住した高学歴の日本人女性、五五名について移住前と移住後の体験や意識の変化を類型化して、アジア大都市圏で就職しながら、異文化・社会で特に仕事、家庭、地域社会での新しい生き方を体験することがどのような戦略や意味を持つのかについて焦点を当てて実証的に分析しているのである。

彼女のユニークな評価の第四点目は、比較社会学の方法意識である。前述の実証的な事例分析を通じて、移住女性の全体的な意識変容をもたらす大きな要因として「家事と育児の解放（軽減）」、「夫の家事と育児分担」、「キャリア意識の再強化」、「ジェンダー意識の再社会化」などの動きを明らかにして、今後の比較社会学の試みを展望している。方法論的にも、質的インタビューやライフヒストリー研究に際して、異文化や複数言語の使用など困難な面もあって、比較社会学の調査方法はかなり困難である。オイ君は、マレー語、英語、中国語、日本語と四カ国語を駆使して、それぞれの文化的背景や歴史などにも精通している。今後の展開が楽しみである。

しかしながら、本論文においても考察が不充分で今後の課題とすべき点も指摘できる。第一に、理論的な考察に関して言えば、ジェンダー観とキャリア意識をめぐる意識変容に関する社会意識論が中心になっているが、体験、状況の定義・再定義、意識と行動、戦略などをめぐる「行為理論」の基礎的な考察や国際人口移動論に加えて、国際的な社会移動論（transnational social mobility）、階層移動の視点などを取り入れて深めていく必要があるという点である。特にジェンダーと階級・階層の観点は、重要であろう。

第二に、社会調査に関して言えば、対象者の時系列的な縦の系譜が十分明らかにされてはいない。移住以前に対するインタビューは、回想法であって、パネル調査ではない

し、どのような成育歴や学歴・職歴や家族関係などが移住動機と結びついているのか、移住後のジェンダー意識やキャリア意識の変容と結びついているのかは個々の事例においては解明されていない。欲を言えば、より深いインタビュー調査、更に移住前と移住後という二時点の時間設定に加えて、今後もう少し調査対象者のlife story、life history にそった、より長期的な縦断的な調査（longitudinal survey）を展開していく必要があるものと思われる。

第三点目は、「ジェンダー研究」を掲げた場合には、女性のキャリア形成意識だけではなくて、男性移住者を含む、移住動機や移住過程を調査して、ジェンダー差異と日本人、ホスト社会の差異をも比較する複合的比較が必要であったものと思われる。ジェンダー差異を意識すると、欧米男性とアジア男性の差異も出てくるし、女性雇用の欧米型とアジア型の違いももっとはっきりと現れたかもしれない。アジア発展途上国からの出稼ぎ女性労働者たちの「メイド雇用」を前提とした上での、既婚女性たちの継続就労タイプは、男性の家事参入を阻む、新たな性別役割分業の国際分業版であるのかもしれない。その意味でも、「国際人口移動とジェンダー」は複合的・重層的である。

以上のような問題点は存在しているが、オイ君の研究成果はなお独創的で、今後の課題については本人も十分自覚しており、将来克服できるものであり、本論文の価値を損なうものではない。結論として、審査員一同は、オイ ション ゴウ君に博士（法学）（慶應義塾大学）の学位を授与することが適切であると判断するものである。

平成一九（二〇〇七）年七月二〇日

主査　慶應義塾大学法学部教授　法学研究科委員博士（社会学）　有末　賢

副査　慶應義塾大学法学部教授　法学研究科委員社会学博士　関根　政美

副査　慶應義塾大学文学部教授　教育学修士　渡辺　秀樹

副査　慶應義塾大学名誉教授　社会学博士　川合　隆男